

今の私を「外在化」することが大事なのは?! (全生研第 61 回岐阜大会を終えて)

東濃サークル 稲垣 勝義

1. 全国大会は求められていることを改めて知った瞬間

8月11日(日曜日)。全国大会3日目。午前10時30分。会員受付の所に座っていた稲垣の所に、汗びっしょりになった一人の男性が現れました。「受付はここでいいのでしょうか?」「どこからみえたのですか?」「はい、鹿児島からです。」「えっ?! どうやってみえたのですか?」「電車を使い継ぎできました。本当は、昨日来れるはずだったんですが都合で。」「11時30分にテーマ別分科会は終わってしまうのであと1時間しかありませんが。」「1時間だけでも全国大会の雰囲気を感じて明日へのエネルギーにしたいと思いますから。」と言われ、受付をして分科会に向かわれたのです。

あの男性ほどの情熱、意欲がこの今の私にはあるだろうか?とその後ろ姿を見ながら考えてしまいました。たった1時間になるかもしれないけど全国大会の空気を肌で感じたい、それをエネルギーにしたいと考える前に、電車賃はいくら? うーむ、行くのは無駄に近いなあと考えてしまう私がいいます。きっと生きづらい今を生きている自分を打開してくれる何かがある!との確信が、彼を突き動かしているのだと思います。全国大会は求められているということを、改めて遠くから来て下さった参加者から教えられた瞬間でした。全国大会を準備した者にとって、やって良かったんだと思う瞬間でもありました。

2. 参加者に学ぶためのいい環境を準備すること(全国大会を開催するにあたっての第1の任務)

暑い岐阜。この岐阜に来てもらって穂積駅から朝日大学まで歩く? 神奈川の湘南では学校まで歩いたが…。死ぬよ! 「バスを出そう!」「100円で行こう」「いや、無料の方が」とワイワイ話し合っていたのがまるで昨日のことにように思い出されます。

大学バスに付け足して無料バスを運行。大正解でした。あの暑い中歩かせたら学習どころではありませんでした。暑い中、穂積駅に、大学前に立って案内をして下さったみなさん、本当にお疲れ様でした。ありがとうございます。そして、暑い中、受付のロビーに集まってクーラーの効いた中で本を眺める方たち。分科会が始まるまで、教室にはクーラーなし。必然的に本屋の前に集まりましたね。それを厨房で仕事をしながら見ていた中岡さん。厨房での若きリーダー。なんとはなしに私の所に近づいてこられ「私も3人の子どもの親です。先生のお薦めする本を私も読んで勉強したいです。是非、お薦めの本を紹介して下さい。」と言われました。熱心に本を見る、そして、マナーよく昼食をとられるみなさんの姿を見て心動かされたところがあったようです。朝日大学の学食にとって、これだけ大きな規模で昼食を準備するのははじめてのこと。大実験だったそうです。2日目の昼食、動きがよく分からない人たちの案内やら水配りやら、気づいてさっと動いて下さったOBの方々に感謝です。流石です。なみに、学食の方は、日曜日は休日出勤で私たちの学習を支えて下さいました。もちろん、中岡さんにも「お化けの話(紙芝居ふう)」「学校珍百景II」「発達を考える…」の3冊をプレゼントさせてもらいました。

稲垣は、大会本部に詰めているという役割でしたが、10分も座っていたら嫌になって移動大会本部、稲垣がいるところが大会本部などと言って、受付ロビーに居座って動き回っていた稲垣でした。ADHDの気配が漂う稲垣です。おかげで上記のようないろんな人との出会いがありました。

何はともあれ、参加者に気持ちのよい学びを提供するための環境を整えるという観点では合格点もらえるのではないのでしょうか。大学関係では、足立先生にすべて動いていただきました。教室獲得

からバス、厨房との折衝。事務局との折衝。1つ1つが大変なことなのに、当たり前のように淡々と仕事をされる足立先生。しかも、速い。見習わないといけないですね。足立先生なくして、この学習環境はつくれませんでした。改めて感謝、感謝です。

また、全国大会を成功させるためにいろんな方々の力を借りました。岐阜県・岐阜市・穂積市教育委員会の後援をとるために尽力下さった加藤さん・三橋さん・市原さん。この後援は大きかったですね。今までの全国大会開催地の努力のおかげで岐阜県でも後援がとれました。次期、開催地の京都でもこの後援をとるところから仕事が始まると思います。京都が任務を引き受ける。しかし、開催場所は長浜。うーむ、後援はどうなるの？ いらぬ心配をしてしまう稲垣であります。

大会3日間は、OBの方、組合関係者、学童の講師陣の力も借りながらも実務をやり遂げました。主体的に参加して下さったみなさん、本当にありがとうございました。みなさんの力なくして全国大会成功はありませんでした。ここにあらためて感謝申し上げます。

そして、何といたっても実行委員として大会成功に向け計画段階から当日まで、責任を持ってやりきって下さった各セクションの長の方、お疲れ様でした。図書や会計などまだまだこれから仕事が残っているところもありますが、まずはお疲れ様でした。常任委員会との心の行き違いもありましたが、全国大会の準備、そして、毎日の会議、後片付けをいっしょにやりながら話をする中で、その溝も埋まっていく感じがしました。如何でしょう？ 仕事をいっしょに担う中で連帯感が生まれることを身をもって感じました。同じ空間・同じ時間の中、活動を共にするという事は大事なことです。

3、当事者として「当事者性」を発揮するために自分たちを「外在化」する！…これからの課題？

大会開会セレモニーの劇。参加者に大きな衝撃を与えました。土井さんを中心にした若者集団の力を見せつけた素晴らしい劇に仕上がったと見ていて嬉しくなりました。演じる役者と見ている参加者の息づかいがぴったり合って、みなさん劇に集中！「23時59分」「礼1/2/3」「黙って掃除」「廊下は右側、気持ちの良い挨拶。これがスタンダード」などなど。これが、岐阜県の若者の働き方？ というくらい強烈な印象を残しました。大変な状況をコミカルに笑い飛ばす劇。本当は、笑い飛ばせず四苦八苦しているのですよね。それを劇化する中で自分たちの現在を「外在化」することに成功していました。ひとえに土井さんの脚本の秀逸さと演ずる役者の成りきり感の成果です。

そこで、「劇良かった」で終わらせないことが必要なのではないかと思うのです。劇は劇、現実には現実で別なものでは、「外在化」した意味がありません。「外在化」ということは、現実を変えていくことに繋がっていかないと本来の「外在化」とはいえませんが、「現実」に苦しみながらも「理想」をめざして生きていく。これこそが、日本国憲法を守ると誓って教師になった人間の生き方です。理想とありますが、人間として当たり前の生活を送るということです。ちなみに私、稲垣は「3分の一理論」を目指して生きています。1日の生活でいうと8時間睡眠／8時間労働／8時間社会生活(学校以外の家庭・地域生活)という3分の一。人生を俯瞰してみると、30歳までは「お世話になって一人前になる期間」。30歳～60歳までは「お世話になって一人前になったから社会にお返しする期間」。60歳～は、「自分の好きなことをして生きる期間」という3分の一理論。如何でしょう。人間として当たり前の要求として、1世紀前のメーデーで唱えられた8時間労働がいまだに実現していない日本。遅れたむき出しの資本主義社会(新自由主義)の中で生きている私たちの苦しさを相対化しないと巻き込まれてすり減ってしまうだけです。だから、闘う！ まずは、一人で。その姿を見て一人、二人と支持者が増えていく。3分の1理論もすべてその通り行くはずありませんが、それを目指して生きていく知恵を出し合っていないと、家庭生活が…地域生活が軋み始めます。

岐生研のみなさん、どうか、人間らしい生活を目指して生きていきませんか？劇の世界の現実に負けてはいけません。『稲垣先生だからできるのよ！言えるのよ！』と良く言われますが、『稲垣先生が早く帰ってくれるから、私も安心して帰れる。』と女性教師から言われます。『稲垣先生が、あの場で言ってくれたから職場が崩壊しなくてすんだと思う。』とも言ってもらえます。『出る杭は打たれる』とよく言いますが、『出すぎた杭は打たれません。』

4、岐阜県下にサークル活動を！

『全国大会の学ぶ環境をつくる』ことと並んで、私が全国大会にかけたもう一つの目標は、県下のサークル活動の復活と活性化でした。10年ちょっと前、稲垣は、第59回全生研全国大会を引き受けよう！という提案をしました。しかし、その時、開催を決定できなかったのは、県下のサークル活動の停滞という理由でした。その時以来、サークル活動の定例化を頭に過ごしてきました。相変わらず停滞したままだったのですが、若者の全国大会を開きたい！と言う声に押されての開催が今回です。しかし、サークル活動が停滞したまま全国大会に突入しても一発花火で終わるだけ。何とか、サークルの再開、創設をしたいということが私の目標になりました。

何とか現在、①岐阜・西濃サークル ②中濃サークル ③飛騨サークル ④可茂サークル ⑤東濃サークルと県下5地域でサークルを開催することができています。その内、①②③⑤の4つのサークルに顔を出ささせていただき刺激を受けている稲垣です。一発花火で終わらせないためにも、これからの地道なサークル活動が大事になってくると思うのです。参加者の要求を聞きながら、実践交流・理論研究もできたらいいなあと思っています。理論と実践の統一を目指していきましょう。私たちには、足立先生という力強い研究者がいて下さるのであります。

5、最後に

今回、全国大会を開催するにあたって協力を頂いた皆様、本当にありがとうございました。声をかけると快く力を貸して下さい感謝に堪えません。みなさんの協力がなければ成功に導くことはできませんでした。大きな仕事をやり遂げた3日間。あっという間に過ぎてしまいました。「ありがとう」「ご苦労様」という言葉をいっぱい頂きました。ああ、これが生きている充実感かと思いました。最終段階にさしかかり、朝日大学に通い詰め青息吐息の日々。苦しかったのですが、苦しみの裏返しに楽しさでもあるんですね。なかなかそうは思えないのが現実ですが、人と人のつながりの中で労いの言葉を掛け合える人間関係があるというのは財産です。それを無にしないように生きていきたいものです。

岐生研の若い人たちの活躍が眩しかったです。将来を担う若い人たちが、全国大会を機にますます学習と実践に取り組み新しい地平を切り開いていってくれることを楽しみにしています。

今回の全国大会で、確実に白髪が増えましたが・・・全国大会を終えた今、心は少し若返ったような気がしています。（笑い）